

韓国における盲人占ト者の現況 ― 擬制的親族組織「門生」を中心に

安 田 ひろみ

I はじめに

韓国においては古来、盲人は音曲よりも呪術・宗教と深い関わりを有しており、盲人占トは中国文化の影響を受けず、朝鮮で独自に発生した伝統とされる^(註1)。現在でも盲人の三大職業は、鍼灸、按摩、占トといわれており、この伝統は受け継がれている。だが、占トの基盤をなす原理は、時代に従って、仏教、道教、儒教、シャーマニズム、「易理学」等、様々に変遷し次第に宗教性を失ってきた。一種の精霊統御者型シャーマンとも言える、読経・祈禱を主に行ういわゆる「経匠」の類型が衰退した現代、盲人の宗教職能者の主流は、「東洋哲学」を標榜する世俗化した占ト者となっている。

一体、韓国社会においては伝統的に巫に連なる宗教文化を蔑視し、漢字のテキストを用い、「勉学」により習得される宗教文化をより上位に置くが、世俗型占ト者の多くは、靈感による占トを行う巫俗系の「占匠」との差別化を図るため、自らの占トの方法について「学」、「理」等の言葉を用いて合理性を強調している。特に中途失明者の場合は、専ら生計の手段確保を目的とするなど、宗教性をほとんど欠いた存在であると見なされている。

活動の地域も、かつて経匠が師匠から継承した縄張りを相互に侵食しないよう分散に努めていたのに比し、地域社会との紐帯を持たず、「口コミ」や宣伝による顧客の

訪問を待つ世俗型占ト者は、人口の多い都市部に集中している。特にソウルでは、城北区ミアリ峠地域の障害者福祉会館周辺に、1970年代初頭から盲人占ト者が集まりはじめ、現在確認できただけでも、51を数える「哲学館」が文字通り軒を並べている。同地域は疑いなく、国内唯一最大の盲人占ト者の集中地域であるといえる。

彼らは同業者組合である「大韓盲人易理学会」を組織しているが、同会は点字テキストを用いた教育をシステム化して占ト技術の習得過程を短縮・合理化し、国際セミナーや博覧会参加等の広報活動を行って社会的な認知や地位の向上を進め、顧客誘致策として看板デザインを統一して観光名所化を図るなど、極めて世俗的な活動を展開している。

だが、その一方で、同会は李朝時代以来の盲庁の流れを汲む組織でもあり、育成講座の修了者は、師匠を中心とした伝統的疑似親族団体である「門生」(ムンセン)に組み込まれるなど、旧来の伝統の一部を継承している。また、今回の調査の結果、「哲学館」を構えながら同時に経匠として、巫俗系の占ト者と共同して伝統的な賽神儀礼を行う者の存在も確認した。植民地時代、盲人占ト者も巫覡に対する朝鮮総督府の全国的な調査の対象になったが、当時は稀とされた女性の盲人占ト者^(註2)が予想以上に多かったのも、注目に値する。

本稿では、現代韓国における盲人占ト者の研究を始める第一歩として、まず盲人占ト者の歴史を振り返ると共に、ミアリの盲

人占ト者たちが世俗的方向を追求し、大韓盲人易理学会が組織の合理化を図る一方で、門生はどのように機能しているのかを考察したい。

但し、この調査は現在継続中であり、本稿は中間発表的なものであることをお断りしておく。

II 盲人宗教職能者の歴史

自らも盲人であり、盲人職業史研究の草分けである林安秀は、朝鮮において盲人の職業が確立したのは13世紀後半とし、それ以前から現在までを、当時盲人にとって主流だった職業により、被扶養期、占ト期、鍼灸・按摩期に分けた。盲人が文献に現れるのは、三国時代の『三国史記』からだが、いずれも逸話的な内容のみでその職業が記述されていないことから、林は高麗中期までは盲人は職業を持たず、専ら扶養される存在であったと推測している。但し、これはあくまで史料への登場であり、盲人固有の職業や官職についての言及であるから、当時既に盲人が占ト者等として、晴眼者と共に私的に活動していた可能性はあると思われる。

さらに林は、占ト期を盲人の身分等によって以下の四時期に分類している。以下、林の著書から簡単に盲人占トの歴史を振り返って見る。

①盲僧南班期（高麗中期～末期）

23代元宗時から34代恭讓王元年（1389年）までの130年間を指す。この時期、高麗政府は科挙に風水陰陽学を導入し、占トは官学になった。科挙及第者は「卜人」として両班に次ぐ中人（南班：八品以下）待遇であり、冗官的性格の検校の位（従五品～正四品）も授けられた。この時期の盲人占ト者は盲僧であり、僧侶の身分であった。彼らは上命を受けて、祈雨祭、吉凶禍福占ト、呪詛などを行ったことが正史等に記さ

れている。但し李能和らによると、仏僧ではなく、道教の道士に近い「道流僧」であったとされ、この点で中国や日本の盲僧と異なる朝鮮の独自性が主張されている。

②盲僧賤人期（高麗末期～李朝中期）

1389年から約200年間を指す。この時期、朱子学を奉ずる士大夫階級が政治の実権を握ったため、朝鮮朝初期には、陰陽（命課）学を含む医学、兵学、訳学等の諸学は雑学として制度化され、儒学に比して賤視された。命課学は觀象監の陰陽三科の一つで、運命、吉凶、禍福を占うものである。官人である盲人占ト者も、賤視は免れなかった。太宗時にはほとんどの検校職者からも、禄が剥奪された。高麗末の1391年には、既に公私賤口（奴婢）・工商・賣ト盲人・巫覡・娼妓・僧尼等が賤民に指定され、給田支給の対象から外されている。

一方、こうした弾圧に抗し、盲僧たちはその拠点として、ソウルに明通寺を設立した。正確な設立年代は不明だが、高麗期とされる。ここにおいては占ト、祈雨祭、祈禱、読経等が行われ、盲人に対する占ト教育を行う書雲觀が設けられた。彼らも僧の身分として賤民とされたが、この時期から占ト業は盲人に限定され、晴眼者で既に占ト業に携わっていた経客、経師は、地方へ移転させられた。また、一種の障害者福祉施設として、米や奴婢の支給、建物の修理等国家からの支援もあった。即ち、この時期は身分的には冷遇されたものの、盲人占ト業自体は隆盛した時代だった。

③盲人中人期（李朝中期～末期）

壬辰倭乱（文禄の役、1592年）から1894年までの約300年間を指す。儒教全盛の世であり、政治的理由から多くの盲人占ト者が、道教や仏教の読経を活動の一環としながらも表面上儒家へ転向した。盲僧賤人期には盲人占ト者は公的な地位から徐々に疎外され、私的存在となっていたが、1669年

には国トを行う命課盲人制度が復活し、再び国家の保護を得、中人待遇を受けるようになった。

朝鮮朝中期には、盲人の拠点であった明通寺はなくなっていたが、孝宗時には盲人占ト者の統括・教育団体である盲庁が設置され、命課盲人（堂主：読経祭、盲祭等国家の祈禱を行う盲人を指導する役職）の指導の下、盲庁傘下の10門生庁を中心に、盲人占ト者は占トに従事した。この時期、儒教の影響で周易の原理による六爻占が一般的になった。

④盲人占ト業衰退期

1894年の甲午改革から1913年までを指す。近代化を目指した甲午改革で、身分制度が撤廃され、他の様々な「前近代的」制度と共に命課盲人制度も廃止された。これは別の側面から見れば、盲人の占ト業独占を崩し、晴眼者の参入を促すものでもあった。さらに、近代的教育が開始され、合理思想やキリスト教、近代医学が流入するにつれ、因習的として占トや読経の需要自体が減少していく。また、1910年の日韓併合以降は、朝鮮総督府により、巫覡や占ト者を含む「迷信業者」は厳しい弾圧を受けた。1913年には、済生院が設立されて鍼灸・按摩教育が始まり、盲人の職業選択の道も若干広がり、占ト者の供給も減少していった。

こうした中で盲庁は、1906年に組織を牛耳っていたカリスマ的指導者が、建物を日本人に売り渡してしまい、事実上消滅するという事態を迎える。互助組織であり、同業者組合であり、教育機関であった盲庁を失った盲人占ト者たちは、これに代わるものとして1925年、大韓盲人易理大承教を結成するが、これが大韓盲人易理学会の前身である。

III 盲人宗教職能者の類型

韓国における「巫覡」という語は、シャ

ーマン（憑依を受ける巫）、プリースト（世襲巫や、憑依を伴わない占ト者）、モンク（祈禱僧）を全て包含する。一般的に使われる名称でも「チョムジェン」（占匠）は、僻邪招福のための祈禱や占トをする者としての、以上三者への蔑称である。このうち盲人は、道教や仏教の経文を読む盲僧がほとんど見られなくなった現在、憑依を伴わない占ト者に最も多い。

一方、盲人の宗教職能者のみを指す名称は、いずれも男性に対するもので、学術用語に近いものに「メンギョク」（盲覡）、盲僧、一般用語では「パンス」（判数、但し地域や場合によっては晴眼者を含む）、「ソギョン」（盲人の意）、「チャンニム」（同）等があるが、すべて現在ではあまり使われなくなった。これらにしろ、盲人を一般的に指す語であって、特に盲人占ト者を指す語ではないものが多い。現在、印刷物などでは、政治的公正さに留意して、蔑称的なニュアンスがなく男女共通の呼称になる「盲人易術人」、「盲人占ト人」などを用いている。

女性盲人占ト者に対する呼称が存在しないのは、一つには宗教における男女の一種の分業が伝統的だったからである。秋葉隆のいう儒巫の二重構造（男性は儒教、女性はシャーマニズムを信奉し、職能者としてもそれぞれこれを担った）のみならず、巫俗、さらに占トの中にも男女の二重構造といえるようなものが存在した。巫覡という語は、本来の字義を離れて巫＝女性と覡＝男性という意味に用いられるが、世襲巫以外では、覡は専ら漢字の知識を要し、テキストに基づいた占トや読経を行う者として、巫は靈感や憑依により占トや賽神儀礼を行う者として認識されてきたのである。

村山智順は、昭和八年当時の占ト者の男女比率を「男子が絶対多数」で、かつ占ト者の八割が盲人であると記し、これを「朝鮮特有の現象」と述べている^(註3)。過去的女子教育軽視の風潮も、非巫俗系占ト者に必

要な知識の習得を妨げたであろう。

さて、占ト者のいずれの類型も巫俗、仏教、道教、神仙道、儒教等の伝統が習合する部分があるが、靈感や憑依の有無と言う点で大別することができる。仏教、道教系には圧倒的に女性が多く、神仙道、儒教系はその逆である点もあり、互いに反感を持っていることが多いようである。前者は「習えば誰でもできる」非巫俗系占トに対し、神に近い者としての自己を強調し、後者は「哲学」を標榜し非科学的な「迷信」や「淫祠邪教」の類との無縁を強調する。現代の盲人占ト者は後者の典型だが、こうした姿勢はあるいは、開化期に彼らを襲った合理主義の嵐からの生き残りをかけて、身に付けてきたものかもしれない。

次に、各種の占ト者が行う儀礼の差異について述べる。実際には以下のように四種の占トにはっきりと分けられるものではないが、それぞれの特徴を記す。

巫俗系	家神や自然神、土着的神霊、祖霊、悪霊等への賽神儀礼の他、靈感による占トを行う。葉銭占、米占、憑依託宣等を行う。
仏教系	山神経、仏説陀羅尼経等の仏教系偽経も用いた読経、占ト、祈禱を行う。
道教系	玉枢経等、呪術的経文を用いた読経、占ト、祈禱を行う。
儒教系	周易等に基づく四柱占、六爻占、算筒占、松葉占等の占トを行う。

IV 大韓盲人易理学会

ミアリ峠の一帯は、古くからの売春地帯であると共に、そもそも巫俗系の占ト者が集中していることで知られていたが、1970

年代初頭から、障害者福祉会館の周辺に盲人占ト者が集結し始め、現在では500メートル四方ほどの地域に51戸のいわゆる「東洋哲学館」がひしめいている。この地域にこれほど多くの盲人占ト者が集まった理由は定かではなく、彼ら自身「なんとなく来た」というような答えが多かったが、占ト者の集中地帯としての知名度にあやかろうとの動機があったのかもしれない。盲人占ト者の場合は、巫俗系占ト者と異なり、顧客は占ト者個人の「信者」にはならないため、緊密な紐帯が形成されず、信者間の横のネットワークもほとんどない。巫俗系のように山やクッ堂（共同の巫儀を行う建物）等、外部であまり儀礼を行わないため、宣伝は難しく完全に「待ちの姿勢」である。そのため、集中して営業する利点は大きい。住環境も点字ブロックなどの設備が整い、住みやすいとのことで「入ってくる者はいても出て行く者は少なく」、次第に規模が大きくなったという。

<沿革・活動内容>

大韓盲人易理学会は、1950年代に結成され、1971年に法人資格を取得した。障害者福祉会館に本部を有し、全国に10箇所の支部を持つ。釜山、大邱、全州の他、慶尚南・北道、忠清南・北道、京畿道、江原道、ソウルに各1箇所である。現在会員数は公称でソウルに300人程度、地方に1人～200人程度で、全体で400人～500人だという。現在、韓国の盲人の10～20%が占トに携わっており、一時は占ト者の数は減少したが、東洋思想ブームと共に近年再び増加の趨勢を見せているという。

同会の性格は複雑である。1906年に消滅した盲庁に代わり、門生庁が設置されたが、韓末の大韓盲人易理大承教およびこの門生庁をその前身とする。宗教組織の形態をとった前身の大承教とは対照的に、「学会」という世俗的かつ一種野心的な命名は、設立当時の占トへの迷信的なイメージを払拭

し、かつ巫俗系占トとの差別化を明確にする意図であろう。

こうした世俗的側面は、同会の活動内容に反映されている。同会は一つには同業者団体であり、占ト技術の会員相互の交流、中国から輸入した易書の点訳など業務上の協力や、博覧会や会議への参加を始めとする広報活動、料金や看板の統一など営業の統制等を行っている。会員全ての家に掲げられている看板は、八卦をデザインしたというレインボーカラーに、統一された字体、サイズで、この看板がそこかしこに林立している様は一際目を引く。この地域の観光名所化に極めて有効そうである。

同時に同会はささやかながらも研究・教育機関であり、関連書籍の収集や点字書籍の刊行を行うほか、易学研究委員会を擁し、易理学院を主催している。易理学院では、「易学読本」3巻、「命理読本」等点字教科書を用いた占ト者速成教育のプログラムを開発し、月曜から土曜まで毎日2時間ずつ講義を受ければ、資格試験を経て1～2年で占ト者の資格が取得できるようにしている。講義は経験豊かな会員が交代で受け持っている。この速成プログラムは、中途失明者のために同会が開発したものだという。韓国には障害者への福祉手当等がないため、交通事故などで中途失明し、職を失った場合、たちまち生活に窮することになる。伝統的な教育システムでは、10歳から15歳位で師匠に弟子入りし、口伝で占トや経文を習い、10年以上の見習期間を経て独立したが、これではもはや時代に合わず、入門者も減ったため、新たな教育法に転換した。

また、同会は親睦団体でもあり、会員間の困窮時の金銭的援助を含む相互扶助、親睦契、済州島等への慰安旅行や釣り、登山などの行事も行っている。

だが、こうした近代的側面とは別に、同会は李朝時代以来の盲庁の伝統も継承している。盲庁は、代々の師弟関係を軸にした

疑似親族集団である門生を統括していたが、その役割はそのまま同会に引き継がれている。即ち、各門生を疑似リネージとすれば、同会はこれを統合する、いわば疑似クランでもあるのである。

V 擬制的親族団体 門生

<門生の原理と組織>

各門生は、易理学会とは別にそれぞれの内部で、教育機関、相互扶助組合、同業者団体、親睦団体の性質を有する。その核となるのは、教育機関としての機能であり、それ以外の機能は付随的なものである。入門者は師匠と擬制的な父子関係になるが、これにより師匠の所属する門生の秩序に組み込まれる。即ち、師匠の師は祖父、その師は曾祖父、門生の創始者は始祖に擬される。同時期の入門者は兄弟の関係になる。また、同じ先生に師事する者同士は三寸（三親等）関係に擬され、互いに「アジョシ」（年配者への親しみと敬意を込めた呼称）または「三寸」（サムチョン：伯父さん）と呼びあう。同期入門者の弟子は甥にあたり、四寸（四親等）と呼ばれる。

これらの序列は、実際の年齢に関わりなく、入門時期による。従って、始祖から数えた世代深度により序列が決定する訳であり、韓国社会の基盤であり、個人のアイデンティティの源泉である父系出自集団と原理的には同じである。実際の父系出自集団と同様、この序列に応じて、言葉使いや所作を含む厳格な礼儀作法が適用される。また、祭祀や冠婚葬祭等への参加や経済的負担など、親族関係に伴う社会的義務も果たさなければならない。こうした疑似親族関係を形成することから、門生は門中（父系リネージ）や一家（リネージの分節）に例えられ、実際の門中と同様、一族の家系譜である族譜に似た「会族」の点字系譜が存在するとされる。この、門生の族譜に関しては、多数のインフォーマントから確かに

存在すると聞いたが、残念ながらこれまで
に所在は確認できなかった。

易理学会の支部は各地にあるが、門生は
現在、ソウルにのみ存在する。地方では門
生を形成するに足るほどの数の盲人占ト者
がいなかったためという。一つの門生は10人
から30人のメンバーを抱えているが、入門
の時期による先輩－同輩－後輩間の厳しい序
列上、弟子の中で最も入門時期が早い者が
「門生代表」として内部を統括し、外部と
の交渉に当たる。

門生代表（領座）は、昔は終身制だった
が、現在では2年に1度の選挙を行う。代
表の下に契長、その下に財務、書記、会計、
総務の各一人を置く。10人以上集まれば新
門生を結成することができる。このよう
にして、他の門生から分離独立し、新しい門
生が、生まれていく。

こうした組織形態は、盲庁の時代の門生
とほぼ同じである。盲庁の最高責任者は、
都尚上首と呼ばれ、その下に両班出身の盲
人が属する左一坊庁、平民出身の盲人が属
する右二坊庁があり、それぞれその傘下に
一番から五番までの門生庁があった。門生
庁のメンバーは入門順に一座から五座の役
職を占めた。一座は領座ともいい、この名
称は現在でも門生代表に対して使われてお
り、会議の際、領座が議長を務めるのも同
じである。また、総務に当たる實官、財務
に当たる掌務、書記に当たる文書が置かれ
ていたのも、現在の門生と同じである。当
時の門生は、公務に従うに当たり、左一坊
の一番門生の次は右二坊の一番門生といっ
た具合に、順番に仕事を回したが、このコ
ーディネーターとしての機能は、現在の門
生は持っていないようである。

また、毎月10日と27日は門生の日であり、
門生契（親睦契）を行う。名節やメンバ
ーの誕生日、冠婚葬祭時や困窮時には、金
銭的なやり取りがある。師匠の祭祀や顕彰
碑の建立などを門生が主催して行うことも
あり、門生には、書堂の同門者が師に奉仕す

ることを目的に結成する講である「先生
契」的な性格もあるといえる。

＜門生の系譜＞

現存する9門生について、大同門生の門
生代表である安ソングン韓国盲人易理学
会理事に話を聞いた。以下それを紹介する
(註4)。

李朝時代の門生は、一班門生が両班階級
出身者、二班門生が賤民階級出身者で、そ
れぞれ一番から十番までの門生があり、計
20門生を数えた。現在残っているのは9門
生だが、これは、1906年に盲庁が廃止され、
旧門生庁が置かれた際の8門生から継承さ
れたものである。当時、弟子を取れるほど
の人は8人しかいなかった。旧門生庁の役
割は、現在の易理学会ソウル支部が実質
的に担っており、組織と運営方法は盲庁と
同じという。

現在の門生は、二番、五番、大同、一心、
統一、トンチョン、ポチョン、スファ、ヨ
ンドンの9つであり、二番と五番は旧門生
の流れである。

普通、地方出身者は、現地で易に関連す
る基礎知識を学んだ後に都会に出、誰かに
師事することになる。自分は書堂で儒学を
学んだ後、上京した。ソウルや釜山といっ
た大都市でないと、易で生計を立てるのは
極めて困難であるためだ。従って、現在ソ
ウル以外には門生はない。地方で営業す
る場合がない訳ではないが、門生を作るほど
沢山は人がいないのである。

初めての入門は、先生の姓や同門者に多
い姓が自分と同じだから等、姓によって決
めることが多いが、姓に関係なく好きな門
生を選ぶことはできる。また、「養子」に
出されることもあり、自分で別の門生に替
わることもできる。但し、30歳以下の者が
新たに門生に入るためには、必ず先生がい
なくてはならない。これは、新入者が問題
を起こした際に先生が責任を取るほか、彼

の生活を保証するという意味もある。即ち、先生と弟子は師弟関係であると同時に、父子関係となる。このため、収入が少なく、弟子が一人前になるまでの扶養が難しい先生は、チョンサ（定師）といって弟子を「養子」に出すこともある。親子間の養育・扶養と同様、師弟間では、弟子が独立できるようになるまで先生が援助し、弟子の独立後は、先生の生計が困難になれば、弟子が扶助するべきであるとされる。

どの門生にも適用される普遍的な憲章である以下のような五戒五律のほか、各門生にはそれぞれ独自の規則が存在する。違反者には追放、罰金、謝罪等の処置がとられるが、かつてのように厳格ではなくなった。現在では追放されるようなことはない。

●門生内部の戒律：五戒五律

五律

- 1 愛人団体（人と団体：門生を愛せよ）
- 2 至誠為事（師と先輩に誠を尽くせ）
- 3 一道明德（常に善のみ為せ）
- 4 必須倫鑑（五律三綱を守れ）
- 5 事有終始（物事は始めたら完成させろ）

五戒

- 1 弊悪
- 2 耽女
- 3 淫行
- 4 詐欺
- 5 犯罪

<門生の分派独立>

門生は、次三男が本家から分家するように、新たに設立したり、元の門生から分離・独立することが可能である。これについては、トンチョン門生に所属する金テモク韓国盲人易理学会前学術理事（サンヨン哲学館主人）に話を聞いた。

旧盲人庁から門生庁に移行した後、継承されてきた九つの門生のうち、二番門生、五番門生のみが現在も残存している。共に

最も保守的な性格を持つ。二番は李朝時代の一番門生に当たるエリート門生である。さらに二番から大同、フェファ、統一、一心等の門生が分派した。特に、1950年代にできた大同門生の歴史が最も新しい。大同は門生の伝統的な序列に反対して、分離・独立したもので、設立当初はわずか三名、各門生から破門に近い形で出た者が集まってできた。統一門生も同様である。

大同門生内での改革とは、年齢に関わりなく入門時期によって決まっていた厳しい先・後輩関係を排し、一般社会と同様の年齢秩序を導入したものだ。昔は後輩に当たる者は、会議での発言権もなく、先輩の意見に反対したりした場合は、大騒ぎになった。但し、昔は、入門が早い者はずっと年上の「後輩」に対し、パンマル（ぞんざい語）を使ったりしていたが、現在ではどの門生でもそのような事はない。こうした慣行は、外部の人から「目が見えないから、敬うべき年長者を間違っていて遇している」と差別的な目で見られたりしたためもある。

VI おわりに

さて、このようにみて来ると、盲人占卜者の団体である大韓盲人易理学会は、各種の近代的なシステムを導入し、同業者組合や会社的機能を有するなど、一見ゲゼルシャフト的な結合によっているように見えるが、組織の根幹をなす門生の性格は、高度にゲマインシャフト的、というよりも正に擬制的親族組織であるといえる。韓国人は全員が、それぞれの父系出自集団に生得的に所属する訳だが、盲人占卜者はいわば二重の帰属をしていることになる。しかも門生は極めて厳格な結合を求めるものであり、父系出自の原理を第一義的なものとし、それ以外のものを排斥する傾向のある韓国社会においては、門生は職業集団としてはかなり異例の存在である。あるいは、盲人自身が周縁的な存在であるため、一般の秩序

から外れることに、自他共にあまり抵抗はないのかもしれない。だが、実際に個々のメンバーが自己の父系出自集団と門生との関係をどう調整しているのかは、今後の調査課題である。

また、女性占ト者と門生との関係も、重要である。父系出自集団内部の女性は、成員権はあっても活動の主体たりえない部分がある。これと同様の原理による門生内部では、女性がどう位置付けられているのだろうか。今回、残念ながら女性の盲人占ト者からは、門生についての詳しい話は聞けなかった。

これまで盲人占ト者には男性が圧倒的に多く、女性は稀というのが一般的な認識だった。だが、ミアリ峠地域では、51軒中、今回確認できただけでも女性占ト者が実に20軒を占める。集中地帯のある通りでは、18軒中、確認できただけでも9軒が女性占ト者だった^(註5)。正に女性ストリートである。

こうした女性占ト者の増加については、客層や年齢の変化が関係しているかもしれない。調査中は顧客に若い女性やカップルが多いことが目に付いたが、若い女性が一人で来る場合は女性占ト者の方を好むという。「家に入る時に安心できる」「恋愛絡みの話をし易い」ともいうが、客層の若年化が進んでいるともいえる。この地域に女性占ト者が集中しているのか、あるいは実際に女性占ト者が増加しているのか、だとしたらその理由は何か、調査する必要がある。今回は世俗化と盲人占ト者の宗教性について、十分に検討することができなかったが、女性占ト者の増加はこの問題とも関係すると示唆できる。女性占ト者の中には、近代化以降、男性占ト者が懸命に作り上げてきた、占トに対する「科学的」「合理的」イメージに拘泥せず、むしろ神秘性を強調しているものも見受けられる。女性占ト者の店には「梅花夫人予言家」「〇〇占星家」などの非伝統的な看板が見受けられた。こ

れは昨今の神秘主義ブームの復活に関係しているかもしれない。

また、巫俗系職能者と、盲人占ト者を含む易学（儒教）系職能者の間には、明確な対立関係が見られるが、にもかかわらず、巫女との共同儀礼を行っているケースがあった。また、盲僧の伝統である読経儀礼自体が、都市では見られなくなっているが、現在でも「百八読経」（盲人読経師の最大規模の伝統儀礼で、108名の盲人が読経する）を行うと答えた人もおり、世俗化が進んでいるとはいえ、どの程度の宗教性が残っているのかも注目される場所である。

*本稿は、文部省科学研究費助成による国際学術研究「アジア漢文化地域の民族宗教に関する宗教人類学的研究」（研究代表者：佐々木宏幹駒澤大学教授）の一環として、現在継続中の調査に、主に基づいたものである。現地調査は1998年8月及び99年8月にそれぞれ1週間程度行った。その際、大変お世話になった大邱大学の林安秀先生、大韓盲人易理学会の皆様、インフォーマントになって下さった方々にこの場を借りてお礼申し上げる。

註

- 1) 孫晋泰pp.392～394、李能和1988, p.52。但し、秋葉隆は、当時の盲人占ト者の一般的な呼称である「パクス」の語源を、「ウラルアルタイ民族の男覲の呼称として広く存在する所の女真語 bahsih、満州語の faksi、ゴルヂ語の paksi…中略…と同系のものと思われる」（秋葉、1950, p.43）とし、大陸との繋がりを示唆している。
- 2) 秋葉 前掲書p.43
- 3) 村山p.86
- 4) 林の記述と合致しない部分があるが、あえてそのまましておく。
- 5) 女性占ト者であるかどうかは、実際に本人を確認した少数を除けば、看板に女性名や女性という表記があるか、屋号が花の名など明らかに女性的なものかどうかによった。従って中立的な屋号で女性占ト者の店があるかもしれず、女性の数はさらに多い可能性がある。

参考文献

伊藤亜人

- 1994 「韓国の民間信仰における道教の伝統」
『朝鮮文化研究』 1号

林安秀

- 1986 「韓国盲人職業史研究」 檀国大学校大学院
博士論文

金泰坤、崔雲植他

- 1995 『韓国 易占卜』 民俗苑

金曾企

- 1999 『韓国民間信仰의 実体와 伝承』 民俗苑

崔吉城

- 1989 『韓国民間信仰의 研究』 啓明大学校出版部

村山智順

- 1933 『朝鮮の占卜と予言』 朝鮮総督府

- 1932 『朝鮮の巫覡』 朝鮮総督府

秋葉隆

- 1950 『朝鮮巫俗の現地研究』 養徳社

秋葉隆、赤松智城

- 1937 『朝鮮巫俗の研究』 下巻 大阪屋号商店

李能和

- 1988 『朝鮮宗教史』 (講述) 李能和全集第8巻
韓国学研究所

- 1927 「朝鮮巫俗考」 『啓明』 19号 啓明倶楽部

孫晋泰

- 1981 「盲覡考」 『孫晋泰先生全集』 2 ソウル
太学社

村田熙

- 1994 『盲僧と民間信仰』 第一書房

ABSTRACT

Korean Blind Diviners : An Overview of their Present Circumstances

Hiromi YASUDA

Blind people have traditionally been associated with magic and religion rather than music in Korea. Over the years they have maintained their position in society as religious practitioners by varying the religious coloring of their activities : from Buddhism, through Taoism, Confucianism and Taoism to the "Science of Divination" with which they are associated today.

After recent social changes that threatened their religious status, they started to concentrate in the Miari district of Seoul, where they founded the Korean Divination Academy (KDA) in 1950s. The Academy operates a systematic educational program to impart the principles of divination to blind people, and advertises its activities at international seminars, expositions etc. In a sense it functions as a kind of labor union for blind diviners.

However, the Academy is also the inheritor of a tradition with a long history. It is the descendent of the Meng-Chong, a government-run organization for blind diviners dating back to the Yi Dynasty. The organizational structure of today's KDA includes 9 munsengs, quasi-descent groups specifically for blind people. Munsengs function as school of the divination through the family relation, especially father-son relation. Members of each munseng have a dual identity, shared between their own patrilineal descent groups and the munseng. This dual identity reflects the two aspects of Korean blind diviners today : aspects of rationalism and of tradition.